SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# 散在地域静岡市におけるブラジル人社会形成との関連でみた子どもの教育：ブラジルにおける日系人社会との対比



| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-06-19 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 中澤, 喜代子, 菅野, 文彦 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00010295 |

# 散在地域静岡市におけるブラジル人社会形成との関連でみた子どもの教育

## ――　ブラジルにおける日系人社会との対比 ――

Observable Relationship Between Brazilian Child Education and Community Development in Regions of Shizuoka City with Scattered Population of Foreigners

― Comparison with Japanese-Brazilian Society in Brazil ―

中　澤　喜代子*・菅　野　文　彦†1)

Eliza Kiyoko NAKAZAWA　　Fumihiko SUGANO

（平成 28 年 10 月 3 日受理）

## はじめに

かつて、20世紀初頭から、日本とブラジルの経済情勢に応じて多くの日本人が片道切符でブラジルに渡った。単一民族的意識の強い日本人は、多民族国家ブラジルにおいて自立を追求し、地方部各地に日本人移住地を形成した。彼らは家族・親族のつながりや地域諸活動を通して、自らの地域のみならず他の日本人居住地域との連携や交流も深め、伝統文化を共有しながら外部社会とも折り合いつつ、多様なソーシャル・ボンド（社会的紐帯）を作り、広げていった。そこから子どもも様々な恩恵を受けることとなった。そして今度は、20世紀末近くになって、彼らの子孫が異文化も背景に相次いで来日し、日本国内で日系人社会を形成することとなる。

日本の入管法改正（1989年）を主な契機に、日系２世と３世とその家族が「合法的労働者」として日本に大量流入した。彼らは地方の製造業において労働力不足を補い、日本の経済に大きく貢献してきた。やがて「集住地域」、「散在地域」といった異なるパターンを呈しながら日系人社会を各地で形成し、現在に至る。家族の呼び寄せの増加や出産率の高まりに伴い、彼らの生活スタイルも、デカセギ意識も大きく変容した。子どもは、日系人社会の形成に伴う地域社会との関係から大きく影響を受ける。2008年の経済危機と、2008年から2011年の地震･津波･放射能事故までの過渡期を通して、彼らの生活や人間形成の様相は激しく変容した。異文化や言語の障壁等によって地域社会への参入が難しく、ブラジル人同士（内部）の諸問題の複雑さに加え、彼らの居住が就労等の事情に左右されて点在・移動していることも、日系人社会の存在感・一体感を醸成しにくくしている要因と思われる。こうした環境の中、子どもをとりまく人的環境等にも制約が及び、日系人内部の世代差が出現して、第二世代の若者は日系人社会に支えられるより以上に、日本社会における自らの新たな位置や生活スタイル等を意識して、日系ブラジル人としての民族意識を希薄化させており、さりとて文化的・社会的に不安定なまま自分の居場所を探し求める彼らには、学校的成功や社会的地位を手に入れることは容易でない。彼らはおよそそのような環境の下に置かれていると言えよう。

筆者は、散在地域である静岡市における日系ブラジル人の子どもの教育をめぐる問題・課題について、人間形成を支える背景要因としての日系人社会の諸条件との関連から、探ってきて

* 静岡市国際交流協会・静岡労働局（教育学研究科学校教育研究専攻修了）

† 学校教育系列

いる。日本における日系ブラジル人の子どもの教育については、すでに日系人の就労や生活などとも関連づけながら、活発な研究が蓄積されてきている。例えば、日系ブラジル人の子どもに関する教育や進路選択、生活などの実態をみることができるのは、関口（2003）、田島（2003）、小内（2003, 2009）、宮島（2014）、山本ら（2014）らの成果である。しかしそれらはほぼ全てが、集住地域に焦点を当てたものである。集住地域では問題が早期に顕在化するため注目も集まりやすく、また、初期段階で関係者による支援方法も工夫される。他方、散在地域の特徴や実態、問題等は一見しただけでは掴めず、問題がなかなか表面化・顕在化せずに、そのまま根深く進行するケースも多く、個別的な問題として外在的に捉えられがちである。そこで筆者は、長年静岡市で務めてきた相談員[2)]としての経験や実践を活かして具体的・継続的な事例に即し、また筆者自身が日系ブラジル人であるという経験や視点を活かして考察を試みてきた。

本論文では、以上を受けつつ特に、散在地域静岡市における日系人社会の状況を、ブラジルにおける日系人移住地の状況と対比することを、作業の柱としたい。具体的には、筆者の出身地でもあるアリアンサ日本人移住地[3)]という特徴的な環境条件・要因をもつ日本人移住地を比較対象とし、内在的に検討したい。比較対象２者――20世紀の主に筆者が育った60～80年代を中心としたブラジルの日系人社会であるアリアンサと、主に21世紀に入る前後からを中心に捉えた日本の南米人散在地域である静岡市と――の間に何重もの条件の相違が輻輳・交錯していることに加えて、ともに筆者の個人的・主観的な視野による制約も介在する。そのような意味で厳密かつ客観的な「比較」とはなり得ないことも自覚したうえではあるが、困難の多い諸条件下での異国における日系人社会の「ソーシャル・ボンド」形成を探るうえでは、こうした幾ばくかの飛躍も伴うような対比作業の必要性が痛感されたことも事実である。それゆえ、本論文では敢えてこの２者間の対比を通して、静岡市の未来展望に迫りたいと考えた。

なお、事例をとりあげる際には関係者の相談記録やインタビュー記録に手を入れ、個人的な特徴等を可能な限り要約・編集して、本人が特定されないための配慮を加える[4)]。また、静岡市在住外国人の生活状況等をとらえるために、静岡市男女参画・市民協働推進課から提供して頂いた資料類も適宜活用することとする。

## １．ブラジルにおける「様々な日系人スタイル」とアリアンサ日本人移住地の状況

### （１）「様々な日系人スタイル」とその背景

日系ブラジル人の歴史は、1908年に遡る。以降、彼らは世界最大の日系人社会を形成することとなった。今や、少子高齢化等の影響で各地の日本人移住地は衰退（或いは消滅）しており、また、ブラジル社会への進出や混血の急増等により日系人社会への帰属意識も希薄化している。

日本のブラジル集団移民は「家族型」として知られており、教育熱心な日本人にとって子どもの教育は最初から大きな課題だった。戦前と戦後とで彼らの「子どもへの教育」への姿勢は異なっていた。戦前の日本人は帰国に備えて子どもに日本の流儀を身に付けさせたが、日本の第二次世界大戦への参戦と敗戦により、祖国へ帰国する夢を諦めざるを得なくなった。敗戦は日本人の定住への引き金となり、親は現地で子どもの教育に力を入れた。彼らは、日本人移住地を通して伝統文化等を共有し、子どもをブラジル人学校に通わせながら日本文化をも身に付けさせ、子どもの生きる力を高めた。単一民族的意識の強い彼らはブラジル各地で日本人移住地を形成していき、異なる世代間の交流を地域内のみならず、他の地域の間でも追求し、連携・交流を深めていった。こうして保守的な日本人は日本文化等を守りつつ、外部社会との共生・共存にも取り組んでいった。やがて高学歴を目指す若者は、異なる専門的分野で活躍しながら

ブラジル社会に浸透し、信頼性の高い日本人像が定着した。小嶋茂によると、1970年代当初には、サンパウロ州人口に占める日系人の比率はわずか2.7％であったが、サンパウロ州立総合大学の合格（者に占める日系人の）率は約13％に上っていたという。筆者の記憶によると、アリアンサの若者の流出を含め、1970年代から1980年代にかけて各地の若者が就職先や大学等の選択肢の多いサンパウロ市やクリチバ市等への移動する動向が既に主流になっていた。

ブラジルにおける日系人の混血率は1980年代の３世世代の混血急増から４世世代にかけて急速に上がり、多種多様な日系人の背景にはブラジル社会への同化や都市化、核家族化、世代差、混血等の諸要因が混在している。日系人のブラジル社会への同化の進行について、次の調査（ブラジル移民の100年）がある。「1958年（昭和33）のコロニア実態調査では3.5％であった非日系との婚姻率は、1962年（昭和37）補足調査では13.6％となり、1988年（昭和63）の調査では45.9％となった。２世までは親（１世）の反対で少なかったが、３世、４世になると制約がなくなり、急速に混血が進み（1988年時点の調査ですでに３世の42％、４世の62％が混血）、遠からず日系人が何であるかが人種的にはわからなくなるといわれている」。

こうして日系ブラジル人は様々な変遷を遂げ、今や６世が誕生している。彼らの出身や背景、同化への浸透の度合い、社会的地位、世代差により特徴が異なり、家族形態も直系家族や大家族から核家族へと移り変わった。一律ではないものの、核家族という形態が中心的になる以前までは日本の文化も守られてきたが、地元や親元から離れて生活していく若者はブラジル社会への同化に伴い、ブラジル人というアイデンティティ意識が顕著になる。現在の３世・４世は、成長過程に伴う自己形成空間や教育環境等により日系人としての特徴は異なるが、殆どの場合ブラジル社会への浸透が完了すると同時に国籍のアイデンティティ形成もほぼ完了したと言われている。こうした背景をもつ彼らを総称して「様々な日系人スタイル」と呼ぶ。

### （２）アリアンサにおけるソーシャル・ボンド

移民当初、日本人は主に地方のコーヒー農場で働いていた。様々な困難を克服するため、日本人同士で土地を求めるようになり、助け合いから誕生した様々なソーシャル・ボンドが拡張していった。そんなアリアンサは、より良い移民へのルーツを作るために建設され、「珈琲より人を造れ」をモットーに、「さながら日本」という姿を今も守っている。

現在、少子高齢化等に伴い、殆どの日本人移住地は顕著に移り変わっているという。静岡新聞（2016）の日系人への取材によると、サンパウロ州スザノ市の日系人社会では「若者は生活の面でも日本語の存在感は低下し、主に日本語で会話している家庭はわずか2家族だけであり、日本を巡る意識も世代間で異なってきている」、また、若者にとって、日本語を学ぶのは「自分にとってはより実用的“外国語”学習という意味合いが強く、“将来、仕事に役立つから”という若者の考えが多く、日本人移民の“母語”を継承する捉え方ではない」という。こうした日系人社会の変化に伴い、日本語を学習する意識も世代と生活環境によって異なっている。しかしアリアンサは例外的に、衰退等の問題も皆無ではないが、現在も日本的な風土を守っている。それゆえ、アリアンサは近年、「日本文化を継承する最後の移住地」と言われるほど国内外の研究者等から注目されている。近年、ブラジルにおける日系人の人口調査等も難しくなり、調査は殆どされていないようだが、その要因はブラジル社会への同化･混血等に伴い日系３世･４世から複雑な混血が急増したからである。そこに、アリアンサによる貴重な歴史調査がある。地域の有識者らが『アリアンサ移住地1924-2007年、創設八十年』を2012年８月に発刊したもので、これが最も新しい日本人移住地の歴史編と思われ、７年間という長い歳月を経て全アリ

アンサの実態等を隈なく調べ、完成させた調査資料である。特に率先して調査に取り組んだ新津英三[5)]は、顧問として大きく携わり、アリアンサが誇る最年長の有識者である。第一アリアンサの存在感を醸成する弓場（ゆば）農場では１世や２世、３世も日本語を“母語”として普通に使っており、言語調査等を行うために農場を訪れる日本の研究者等は珍しくない。木村（2013）は、1978年にアリアンサを訪ねた際、次のように語った。

> 「当時は日本人移住地を訪ねても、すでに二世で日本語を話す人とはめったに会えなかった。ところがアリアンサを訪ねてみると、ユバ農場では二世も三世もごく日常的に日本語を使っていた。ユバは特殊な農場だとは聞いていたが、それにしてもなぜここだけ日本語環境が残っているのか。サンパウロ市で話を聞く限り、ユバのような特殊な農場があるのは弓場勇というカリスマ的リーダーがいたからで、弓場勇は二年前に亡くなったから、遠からず農場は消滅するであろうというのが一致した意見だった。」
> 「17 年後、わたしはふたたびアリアンサを訪ねることになった。かつて訪ねた日本人移住地はブラジル人の街に変わりつつあったが、アリアンサは相変わらず日本的な村として存在しており、村の文化センター的役割を担うユバ農場には、日本では姿を消してしまった懐かしい日本が生きていた。あらためて日本文化を残す力とは何だろうと考えはじめた。」　　木村　2013 年 11 月号掲載

しかし、なぜアリアンサではこうした風土や日本文化等が長年守り続けられるのだろうか。これについて興味深い調査結果がある。アリアンサ日伯文化体育協会（2012）の調査によると、アリアンサで日本文化が顕著に保たれている一要因は、1世と2世世代がそれぞれ人口全体の14％と42.5％を構成しているからである。家族形態のうえでも核家族を含め、直系家族や拡大家族などの家族構成が存在する。また、日本語の継承についての意識調査では、150世帯から回答を受け、その理由として最も多い回答は「日系人としてのアイデンティティの維持のため」で、全体の36％を占めているという。次いで、約20％が「文化継承のため」とし、アリアンサの特徴が際立っている。また、少子高齢化や都市化等から日系人同士の出会いが少なくなっているが、混血が最も少ないと思われる現在のアリアンサでは2007年の日系世代別人口構成調査によると混血は5.8％、非日系人は2.6％であった（回答世帯員数536人）。この場合、日系人社会に溶け込むため、非日系人側が日系人の文化や考え方等に合わせる傾向がある。例えば、非日系人とその家族は青年や婦人会等に所属し、日本語学校や恒例行事等に積極的に参加する。日本人移住地で暮らす非日系人が、自分をマイノリティとして捉えるからであろう。こうした環境で育つ子どもは家庭や地域活動等を通して様々な恩恵を受けている。子どもの人的環境や自己形成空間等は、移民日本人が自国文化を守っている環境とブラジル社会の環境との両者と共存・共生し、現在も充実した環境づくりに取り組んでいる（図表-1）。

いずれにせよ、静岡市の日系ブラジル人の対人関係や自己形成空間とは直接的な関係があまりないと思われるが、かつて日本人は限られた環境の中で自分の可能性を見いだすため、情報を共有し、手探りで日本人なりの繋がりを作っていった。彼らはコミュニティの求心力を強めつつ、外部の地域社会との共存とも両立させようと努めてきた。ここに、子どもの人間形成を支える要因としてソーシャル・ボンドの強さを垣間見ることができよう。例えば、アリアンサの建設にあたっては、まず小学校の開校が最優先された。ニーズに応じて1970年には州立中学校が誕生し、さらに1972年には州立中学校に高校部が開校された。現在は、幼児教育も提供されている。ブラジルの学校教育制度には、授業参観や懇談会、家庭訪問、グループでの登下校等はない。また、保護者同士での意見交換や情報共有等は薄い。換言すれば、学校は「子どもが勉強する場所」であり、日本に類似するような仕組み、例えば学校に関連する地域住民、地元企業などといった地域との共同運営が行われているとは言い難い。日本のＰＴＡの概念とも非常に異なり、例えばアリアンサの保護者は年に４回位学校で集まり、学校側から子どもの成

績等を伝えられ、アドバイス等を受ける。このようなコミュニティや家庭環境等は、子どもの人的環境に大きく関わることとなる。日本人・日系人はコミュニティや家庭等を通して子どもの道徳やしつけを最初から強く意識していた。そこで子どもは生活の中で自然に、義務感や上下関係、責任感、我慢することへの理解などを身に付ける。当時の日系人の親世代にもよるが、特に筆者の記憶に残っているのは以下のようなことである。参考のために一例として挙げる。

事例 -1:
・約束や時間を絶対に守ること。他人に迷惑をかけないということを常に心掛けること。
・食事は全員が揃ってから決まった時間に食べる。食べ物を残したり、食べ過ぎたりするよりも「腹八分目」を習慣づけること。早寝早起きは日頃からすること。
・整理整頓は日ごろから身に付けること。また、自分できることは、人に頼まないで頑張って自分ですること（例えば、洗濯やアイロンかけ、自分のお弁当、部屋の掃除や片づけ等）。
・子どもの頃から責任を持たせること。当時、ブラジル人学校と子どもの保護者等との連携が殆ど無かった、そのため、学校での遅刻、早退、休みなどは理由がない限り絶対にしてはならないという意識づくりや責任感を育てることが大切であった。宿題や進級試験のため勉強を優先し、時間があれば家庭の手伝い、例えば味噌や豆腐などの和食づくり、野菜畑の手伝い、布団づくりなどの手伝いをする。
・年齢に相当することを見分けること。例えば、子どもは童謡を歌ったり、お手玉やじゃんけん、あやとり、影絵、かくれんぼで遊んだり、てるてるぼうず、七夕、折り紙、うちわなどを作る。大人用の本や雑誌、漫画、映画などはその年齢になってからであった。また、姉妹共通の趣味として料理や絵描き、刺繍、編み物等であった。父親と兄弟は釣りの準備をしたり、仲間と常に釣りの計画などを立てたりして男性同士での環境を楽しんでいた。

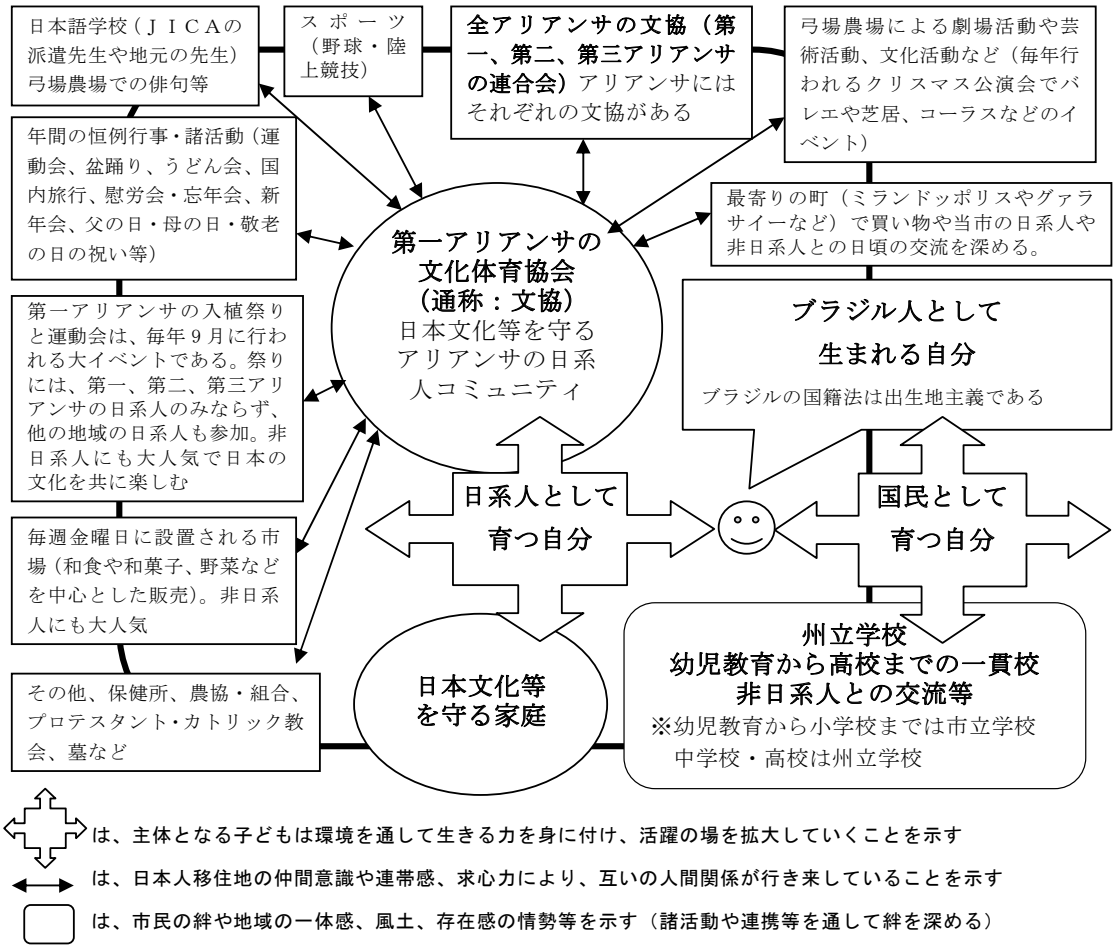
アリアンサには、現在でも例えば４世代家族の世帯も存在しており、他にも興味深い事象が出現している。それは、他の日本人移住地が衰退、或いは消滅していく一方でアリアンサの存在感が際立っているからである。例えば、第一アリアンサの入植祭りは毎年９月に行われており、来場者は年々増えているようだ。筆者がアリアンサで過ごした時期は、主に地元や周辺の来場者が多かったが、現在の祭りは「待ちに待った」大イベントとして他の地域から注目されている。ニッケイ新聞（2015）による次の掲載を一例として挙げる。

「第一アリアンサ（通称長野村）で５日夜、入植 91 年祭をかねて盆踊りが行なわれた。好天にも恵まれ約１千人が来場、入植 90 周年を祝った昨年以上の賑わいを見せた。第一アリアンサ文化体育協会（望月友三会長）主催。弓場バンドが演奏する「花笠音頭」「ソーラン節」「オクラホマミキサー」などの民謡９曲に合わせ、来場者は飛んだりはねたり、様々なアレンジを加えたりしながら盆踊りを楽しんだ。午後７時半から９時までの１部が終わっても踊り足りない若者は、２部開始前の休憩時間もポップ音楽の放送に合わせて体を動かしていた。アリアンサ文協婦人部のうどんや弓場農場のたこ焼き、焼きおにぎりやカキ氷などの出店にも人だかりができた。たこ焼き、焼きそばは１部が終わる頃に完売する売れ行きで、弓場農場の矢崎正勝さんは「この界隈では食べられないものが色々あるので、住民に喜ばれる。若いブラジル人も上手に箸を使って食べていた」と盛況を喜んだ。７日の祝日は家族慰安運動会が開かれ、第一アリアンサから老若男女が集ってさらに交流を深めた。」　　ニッケイ新聞　2015 年年９月 22 日掲載

こうして、第一アリアンサの祭りは様々な来場者により、毎年盛り上がっている。かつて、婦人会や青年会のメンバーが様々な企画を立てるなど積極的に参与していたが、少子高齢化等のため、現在の第一アリアンサには婦人会や青年会、日本語学校とスポーツを統括する文化体育協会（以下、文協という）が存在する。第一、第二、第三アリアンサにはそれぞれの文協があり、これらを総括する「全アリアンサ文化体育協会」の連合会が存在する。また、弓場農場では俳句の教室を設けており、有識者の新津は現在も教室まで足を運び、俳句の指導者として活躍している。こうした豊かな環境で育つ子どもは、主体となってブラジル人であることも日系人であることも誇りに思うのが普通である。筆者が見聞する限り、アリアンサでは若者の不良組織は存在せず、犯罪も起こったことがない。皆、昔から顔見知りであり、地域そのものが正に“ソーシャル・ボンド”になっている。現在も１世や２世が率先して諸活動を通して絆と一体感を形成しており、日系人同士や外部地域社会との間でも意思疎通が図られている。

アリアンサでは今も変わらない人と人のつながりが地域への愛着に結びつき、日本文化等を守る力となっており、次世代へ継承されている。愛着があってこそコミュニティに属し、地域社会に属しているからこそ生活文化も継承されている、と言えよう。筆者の十代後半までの実体験も加味して、現在の第一アリアンサの概観を次の図のようにまとめた。

**図表-1　アリアンサにおける子どもの対人関係・自己形成空間（例）**




また、アリアンサに繋がる興味深い取り組みがある。筆者は、ブラジルへ渡航した日本人は主に地方を活躍の場とし、多種多様なソーシャル・ボンドを作っていったと述べたが、当時、地方ならではの悩みがあった。子どもに高学歴を取得させるためにはどうすればよいのかが、彼らの大きな課題だった。大学は都市部にあったからである。かつて、アリアンサ創設にかかわった輪湖俊午郎について次の記載がある。「日本力行会員は輪湖をサンパウロに招き、奥地二世がサンパウロで勉学できるよう、手弁当でアルモニア（ハーモニー）学生寮の建設運動に奔走していた。輪湖は六年間無償でこの運動に献身し、建設資金の大半を集めている。現在は幼稚舎から高等部までの一貫教育を行うアルモニア学園となり、日本語を必修科目とするブラジル唯一の教育機関として注目を浴びている」。こうして、彼らはニーズに応じて他の地域や関係者等と連携を深めつつ、子どもの進路選択の幅を広げるためや日系社会の発展のため積極的に動いていた。試行錯誤を重ね、彼らは1953年に「アルモニア寮=Casa de Estudante Harmonia」をSão Bernardo do Campo市[6]に創設した。長期にわたって、各地における地方出身の子どもがこの学生寮で共同生活し、サンパウロ市の大学に通学していた。1992年に「アルモニア学

園＝ Colégio Harmonia」と改名された学園は、かつて多くの著名な日系人を輩出した。現在は約420名の児童生徒（日系人は20％）が通学しており、非日系人の割合が多いということが興味深い。日系社会との深い繋がりをもつアルモニア私立学校は、日本の学校行事に類似したプログラムをも組んでおり、質の高い教育機関として注目されている。

かつて移民日本人は、言語の障壁や異文化等に直面し、また、当時の独裁政権の下で迫害を受けた経緯もある。異国での日本人としての意識が高まる中、日本人移民に「同化の志向性がない」と捉えられたが、そこで守られた日本文化や日本人の気質・道徳、日系人像は、今やブラジルの宝物とされている。このように、アリアンサにおいて、子どもが自分の可能性を見いだすためのソーシャル・ボンドが形成されていたことを確認しておきたい。

## ２．静岡市における日系ブラジル人社会と子どもの現状

### （１）静岡市における日系ブラジル人同士の関係

1989年に、日系２世、３世及び配偶者とその家族の合法的な就労を可能とする出入国管理及び難民認定法が改正され（以下、入管法改正という）、翌年６月に施行された。日系人は地方の製造業に非熟練労働者として従事し、当初は直接雇用で雇われた者は少なからず存在したものの、やがて間接雇用の雇用形態が一般的となった。日系ブラジル人の言葉の障壁や部屋探しの困難さをはじめ、彼らの通勤方法等から、派遣会社（＝派遣元）は就職先（＝派遣先）の周辺に住居を用意することが多く、彼らは公営住宅や民間住宅、持ち家等に住んでおり、通勤方法も様々である。したがって、日本各地の産業の規模と特徴に応じ、日系人は独自の社会を形成していくのである。例えば群馬県大泉町は、ブラジルタウンと呼ばれるほど日系人が多い。静岡県の浜松市や磐田市、焼津市、静岡市、富士市などにはそれぞれ産業の規模・特徴があり、それに応じて日系人の「集住地域」や「散在地域」という独自の社会が誕生していく。静岡市は散在地域と考えられ、市内の日系ブラジル人は主に水産加工に関わる仕事や自動車部品会社、食品会社等の単純作業に従事している。しかし、2008年の経済危機と2011年３月11日の地震・津波・放射能事故までの過渡期は、彼らに大転換をもたらした。日系人が直面した経済危機の影響やその後の動向は、ブラジルへ移民した日本人が直面した第二次大戦の影響に例えられるだろう。当時、派遣切りの的となった彼らは直接雇用を願うが、ハローワークで日本人と対等に応募しようとしても壁は実に高い。一攫千金の夢が消える中、日本語の重要さを初めて肌で感じた彼らは子どもの教育環境、特に学校教育を重視し、強く意識するようになった。2008年以降、大きな変化として挙げられるのは、「日本、或いはブラジルで暮らしても子どもに高校や専門学校、大学まで進学させたい。デカセギ暮らしはさせたくない」という保護者の意見である。また、労働環境においては雇用保険や社会保険への加入は以前より多く見られるが、仕事の内容や雇用形態に大きな変化はないといえよう。非正規労働者として派遣会社に従属している日系人は現在も大半であり、勤務先からの待遇など労働条件等に相違がありながら泣き寝入りする人が多いものの、この立場から脱出している人も少なからず存在する。これらの影響に伴い、彼らのデカセギ意識や生活観が大きく変化し、①労働に関する改善、②安定した仕事＋社会保障への適応、③子どもの学校的成功＋社会的地位を強く意識するようになった。

こうして、静岡市の日系人は諸条件によりデカセギ意識を変化させ、また、彼らの生活スタイルは子どもの教育に影響を与えることとなる。例えば、筆者の知る限り静岡市の日系人が「日系人社会のため」「子どもの環境のため」「日系人の輪を広げるため」等に積極的に取り組んでいる様子はない。筆者が辻生涯学習交流館（当時、旧清水市の辻公民館）で子どものため

にポルトガル語講座を開講したが、2008年の経済危機の影響でこのブラジルの言語や文化と触れ合う唯一の場が閉講を余儀なくされた。代表的なサッカーチームも解散した。市内には日系人の交流の場ともいえる南米人向けの雑貨店やレストラン、託児所、旅行会社等利益を目的としたビジネスは誕生したものの、2008年の経済危機の影響で廃業していった。市内に住んでいる日系人の居住は、個人の選択により点在しており、周囲の日本人と円満な関係を築いているとは言い難い。日本人との交流は主に職場関係に留まり、日本人との横の繋がりも希薄化しているといえる。周辺にブラジル人が住んでおらず、日系人同士での交流がないケースもある。こうした諸条件が交じり合う中、彼らの仲間意識は薄くなりがちで、市内のブラジル人社会の風土や存在感を醸成しにくくなる。多様性を認め合うものの異国の地では一体感に結びつきにくくなり、リーダー的な日系人がなかなか誕生しないため、市内には協会や団体等は存在しない。それは、日系人にデカセギという概念が根深く定着しているため、「いつか帰国する」という帰国願望が来日当初のままであるからではないか。市内の日系人内部の問題や諸条件が混在する中、彼らは限られた仲の良い仲間関係を志向するようだ。日系人同士が率先して行動するための活動を工夫し、地域社会の日本人との連携や日系人社会のため等といった取り組みが欠けている一方で、仲の良い小規模の仲間関係が誕生しがちである。例えば、各宗派の仲間、特にプロテスタント派の仲間は以前より増えたようだ。その他、同僚仲間や仲良しサークル等が誕生し、子どももそこに属することで人的環境等の制約を招いてもいる。なお孤立感を抱く者もある一方で、派閥の誕生もあり得る。職場環境において日系人同士での確執や対抗も珍しくない。それは、多様な背景をもつ日系ブラジル人が在留資格の下で同じ立場に立たされているからではないか。それゆえ日本人とあえて交流を深めたい気持ちが芽生えてくることもある。

### （2）静岡市における若者：居場所を求めて

近年、ブラジルの国内情勢につき、明るい将来の見通しはないと思う者は少なくない。日系人の世代差により主に日系３世とその家族の来日、再来日が増えているようだ。したがって、帰国願望を抱く在住日系人は以前と同様、定住先は未定であることがうかがえる。

筆者は、デカセギの子という立場から脱出したい若者の願望が強いと前述した。しかし、学校教育を通して必ず成功するとは限らない。静岡市でも高校（定時制が目立つ）を卒業しても親と同様、工場で働く若者は珍しくない。この場合、彼らは何のために勉強をしたのかがわからないといい、自分の居場所を探し求める。日本で生活せざるを得ない若者もいれば、ブラジルでの生活を求める若者も存在する。こうして若者は自分の活躍の場を求め、時に日本やブラジル以外の居場所を探し求めるケースもあるが、具体的な展望はもてない。

静岡市においても、ブラジルを知らない子どもや民族意識がない（或いは薄い）子どもの世代に移り変わっていき、日本人との交流等も意識されてくる。とりわけ市内のブラジル人やブラジルにおける親族等との交流を深めていない若者は、日本への思いはひときわ強い。彼らの母語は日本語であり、地域の日本人あるいは日本国民としての居場所を求めている。例えば、保護者Ｌは、混血のない子どもｋと暮らし、使用言語は日本語である。Ｌは、仲の良いブラジル人同僚と行き来しており、特に同世代の日系２世の同僚Ｍと長年交流を深めている。Ｍは、自分の子どもｐに対して「ｐのためやｐの学校教育のため、私はブラジルに帰らない」といい、このことは最初から心に決めていたという。一方、Ｌは「私は、いつか子どもと一緒にブラジルへ帰る」と、当時のＭの考えに疑問に思っていた。ブラジルや市内のブラジル人社会に関心を寄せないｋは、家庭の事情で中学校高学年の時、Ｌと一時帰国し、その後、通信制の高校に

進んだが同級生や先輩、後輩などと一切連絡をとっていない。志望の高校に進学できなったため、現在の姿や生活ぶり等を見せたくないという。ＩＴ関係の仕事を目指しているｋは「工場や土建の仕事は絶対にいや」といい、勉強に励んでいる。ブラジルの名前を積極的に名乗らないｋは、オリンピックの日本代表選手を夜中まで熱烈に応援していたという。ｋは、「ブラジルは関係ない国だ。ポルトガル語も分からないし、親戚との交流もない。途上国で治安も悪い」という。一方でM家族は、ｐが高校に進学した時、ｐのために家族全員が日本国籍を取得した。現在ｐは、県外で志望の大学に進み、充実した交友関係を維持し、次の目標を立てているという。Ｌは、かつてMが表現したことを振り返り「私は、見通しがつかなかった。Mは最初から正しかったと、つくづく思う」という。

2008年の経済危機以降、静岡市の日系人は激減し、彼らの結婚や離婚、出産も非常に少ない。リピーターや新規在留資格で静岡市にやって来る日系人も著しく減少した。近年、日系人は永住者という在留資格の枠を超え、日本国籍の取得に関心を寄せ、静岡市でも親子での帰化申請が珍しくない。理由は様々で、家族で日本に定住すること、子どもの就職活動に役立つこと、子どもが日本を自分の居場所とすること、等々である。また、子どもが成長すると同時に自分の国籍や身分、家柄等を意識するだけでなく、ブラジルの名前は否定的に思うことが多い。特に民族意識の薄い子どもが十代を迎える時、これらを意識するようだ。彼らは、日本人との交流を求め、日本人との人間関係を強く意識する。若者は、親のデカセギ感覚と違い、多くの場合、地域の市民・国民として居場所を求める。これらの風潮に伴い、日本人との結婚を求める若者も増え、日本人との対人関係を拡大したいことから日系人社会に関心を寄せない。しかし、保護者は積極的に参与せず、若者による単独の交流になりがちである。異文化で言語的な障壁もあり、日本人との交流を深めたいもののどう接すればよいのか戸惑うことも多い。

近年、新しいデカセギパターンが出現している。主に日本を目指す日系３世とその家族は、「デカセギのため＝一攫千金を夢見る」前提で来日するのでなく、「日本で生活拠点」を前提に来日し、最初から移住を求める「移住型」である。すなわち、彼らは日本の生活水準を意識しているようだ。そのため、日本にいる親族等を通して、住まいや労働条件、社会保障等を事前に確認する。不思議なことに子どもの教育環境の確認等は表面化しない。2015年から2016年にかけて、ブラジルの景気低迷や政治の混乱、治安の悪化などの国内情勢ゆえ、日系人に「ブラジル生活に未練はない」という気持ちが芽生えているようだ。氷河期を迎えている若者の就職活動は容易ではない。例えば、サンパウロ市在住の筆者の知人は「友達の子どもは大学（工学部）卒業後２年間就職活動をしたが、定職に就かず、親の援助を受けていました。そのため、2016年の夏に婚約者と一緒に日本へ行き、ブラジルへ帰国する気持ちは最初からないようです。住宅の様子や労働条件等を事前に調べ、県外の知人を頼ってブラジルを出ました」という。

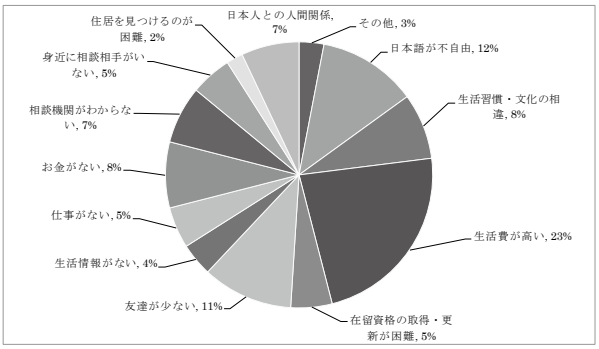
### （３）散在地域静岡市に住む日系人の実態

地域づくりを促すため、政府は2006年に「多文化共生推進プラン」を自治体に示したが、各市町村の対策はどの程度進んでいるのだろうか。静岡市の日系人の世代差に伴い、それぞれの事情によって永久帰国を後にした人も増えているようだ。彼らは「静岡市は静かな町で良いところ」「人々は優しくて治安も非常に良い」などという。しかしながら、実際はどうだろう。

外国人に住み易い環境づくりの課題を前に、散在地域ゆえもあってか行き届かない点も見られ、課題・問題は多様化している。静岡市男女参画・市民協働推進課が行った「静岡市による外国人に対するアンケート調査」の一部を参考として挙げる。

**資料 -1　静岡市外国人住民アンケート調査の概要**
対 象 者：静岡市内在住の外国人住民
調査期間：平成 25 年 9 月 6 日～ 10 月 31 日
アンケート用紙の表記方法：５か国語
やさしい日本語（ルビ付き）･やさしい英語･中国語・フィリピン語・ポルトガル語
配布部数及び回答数等
配布部数：2062 部　　回答数：655 部
回 答 率：31.8%（アンケート実施時の静岡市外国人住民数全体における割合：8.24%）。7,947 人（外国人住民数（平成 25 年 9 月末現在）

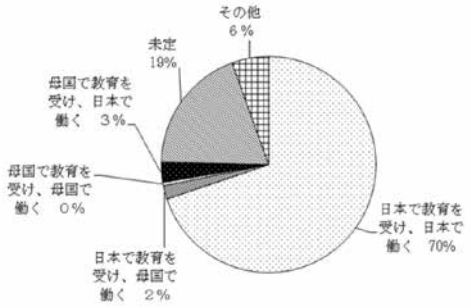
**図表-2　生活上の問題点（複数回答可）**




※上記の円グラフは、静岡市男女参画・市民協働推進課が提供した資料をもとに作成したものである。

**資料 -2**
・外国人住民数の推移について
「本市における外国人住民数は、8,028 人（平成 26 年 4 月末現在）で市人口の約 1.1%を占めています。」である。
・多国籍にわたる外国人住民について
「本市の国籍別の外国人住民数(平成 26 年 4 月末現在)は、中国籍（ 2,124 人（市内に在住する外国人の 27%を占める）が最も多く、次いで、韓国・朝鮮籍（ 1,611 人（同 20%））、フィリピン籍（1,167 人（同 15%））、ブラジル籍（680 人（同 9%））となり、全ての国籍数は 78 か国と多国籍にわたっています。過去 10 年間の傾向では、中国籍が約 58%増加した一方、フィリピン籍が約 33%、ブラジル籍が約 64%、それぞれ減少しました。）である。（平成 26 年 4 月末現在）

**図表- 3（子どもと同居の場合）**
**子どもの将来への希望（複数回答可）**



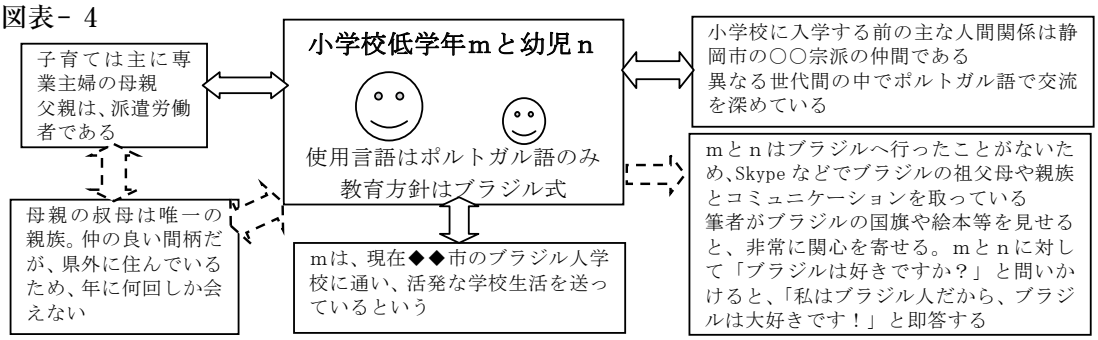

※**外国人住民の定住化傾向**：本市における在留資格別の住民数の割合を見ると、定住すると見込まれる「永住者」「日本人の配偶者等」「永住者の配偶者等」「定住者」「特別永住者」の在留資格者は全体の約 63%を占めています。（平成 26 年 4 月末現在）。また、外国人住民アンケートでは、18 歳未満の子どもをもつ外国人住民の約 70%が、「子どもに日本で教育を受け、日本で働くことを希望」と回答していることから、次世代も含めて長期に渡り日本で暮らすことを希望している外国人住民も多いと考えられます。（平成 25 年度 9 ～ 10 月実施）
※「多文化共生」への市民の意見：第３次静岡市総合計画策定に係わる市民意識調査では、「外国人は、日本社会にとけこむよう、日本の習慣やルールを学ぶべきだ 65.3%」と「行政は、外国人が日本の言語や文化を学べるよう援助すべきだ 63.8%」の意見が高い賛同を得ました。次いで、「日本人は、地域に住む外国人の言語や文化を学ぶべきだ 46.2%」となりました。「多文化共生に関して重要だと思うこと（３つまで回答可）」
**出典**：静岡市男女参画・市民協働推進課が行った「静岡市による外国人に対するアンケート調査」「静岡市多文化共生推進プラン～多文化共生社会の実現を目指して～」 静岡市外国人住民数（2014 年 9 月末現在）

静岡市にはブラジル人託児所やブラジル人学校は存在しないため、子どもは地域の保育園や公立学校に通う。仲間を作っても、交流関係は学校内に留まる場合がある。また、授業参観や懇談会、ＰＴＡ等に参加しない殆どの日系人の保護者は孤立することになる。周囲との繋がりが薄い彼らは、時代の風潮が読み取れない場合もある。例えば、静岡市国際交流協会は近年、小学生の子どもを対象にした「わくわくキッズ英語」講座を設けており、進路選択や小学校の外国活動や英語教科化への関心ゆえか応募が急増しているが、日系人の子どもは不参加だった。

市内の日系人は仲の良い仲間を作りがちだと前述した。子どもはバーベキュー大会や誕生日会等、限られた人的環境の中で民族意識を高めている。例えば、教会は子ども同士の交流の場でもある。異世代間で母語を使って関係を深める機会であり、子どもは生き生きしているという。以下に子どもの対人関係の例を挙げる。子どもｍとｎは市内で生まれ育ったが、家族は地域の日本人との交流はない。そのため、ｍとｎは日本人に対し複雑な思いを抱いていたようだ。母親は、ｍの本能的な「日本の学校という未知の世界への危機感」を次のように語った。

事例－２：ｍが小学校に入る年齢を達した時、私は学区の市立学校に入学させようと思いました。私は、ｍに“来年は日本の小学校に入学するんだよ”、と話をする途端に不安定な状態に陥り、毎回号泣していました。また、ｍの学校について夫と話をする際、常にアンテナをはっているｍは泣き崩れ、“日本の学校は怖い！嫌だ！嫌だ！”と途方に暮れるように必死に叫んでいました。ｍとｎは、今まで日本人と接したことがないです。日本の学校という“未知の世界”に対して“不安や危惧、憂い”などの気持ちが混在していたのか・・・次第に、ｍに学校の話は出来なくなってしまいました。とにかく、ｍにこれ以上の負担をさせたくないと思い、◆◆市への引っ越しを決めました。選択肢として市外のブラジル人学校に入学させる方法しかなかったのです。夫は今まで通り静岡市で働いています。

図表－４




現在、ｍは充実した学校生活を送り、生き生きした姿をみせている。学校で使っているノートや色鉛筆などを常に持ち歩き、誇らしい表情で周りの人に見せたいとのこと。

⟺ は、互いの人間関係が行き来している。

⟨- - - ⟩ は、互いの人間関係が円満になっていない。

- - - - は、互いの人間関係が中途半端になっている。

現在、ブラジル人が地域の市民として存在感を醸成し、コミュニティを代表して諸活動や企画、連携等を通して子どもに恩恵を受けさせていると言い難いと筆者は述べた。しかし、「地域社会の日本人と仲良くしたい」、あるいは子どもに「ブラジル人という身分を受け止めてほしい」「ブラジル文化を身に付けさせたい」等については、彼らの一つの共通点として挙げられる。

日系人の地域社会への参入は、様々な課題・問題があるが日系人が地域社会の一員になるためには、積極的な参加や取り組みも必要と考えられる。地域のため、日本人と外国人双方のため、また、住み易い町づくりのため、一つ一つの問題等を解決すべきであろう。

## ３．静岡市における新しいソーシャル・ボンド

25年余ほどの歴史しかもたない日本の散在地域静岡市の日系人社会と、１．で見た90年余も続くアリアンサ居住地とを、時代や国境を越えて単純に比較することは乱暴であるが、静岡市にも新しいソーシャル・ボンドが誕生し、「つながり」から子どもが将来への夢を描くようになった。以下、筆者が長年見守ってきた保護者Ｇと子どもｒの経緯を一例として挙げる。

事例３：子どもの「ＳＯＳ」に耳を傾けた日本人：学力向上を目指して

Ｇとｒは長年静岡市で住んでいるが、日本人の地域社会との交流は薄く、そして限られた日系人との交流をもつ保護者Ｇは、学校教育制度や情報不足に悩んでいた。Ｇは、ｒの学習問題に悩み、筆者が従事する相談窓口を訪ね、助けを求めた。ｒは、静岡市日本語指導センター(以下、センター校という)から離れた所に住んでおり、放課後に学校まで通えない。ｒは、中学校の授業についていけない状態に陥り、学校生活から落ちこぼれそうになっていった。ｒに対して何とか力になりたいＧは、次の悩みを語った。

「私は子どものため、子どもの成長や学校の様子を見守るため、当分の間仕事はしないと思っています。仕事よりも子どもの学校教育を一番に挙げたいです。しかし、子どもが中学校１年生に進んだ時点で授業についていけなくなってしまいました。２年生に進級した時、もっと大変になったのです。特に数学の授業についてほとんどわからないのです。このままだと、中学校をドロップアウトする可能性が高いと思うので何とかして助けてあげたいです。数学の指導をしてくれる人を紹介してくれませんか？私は、日本人と接点がないし、周りの日系人も私と同様、日本人と交流がないです。子どもは塾に通っていますが、内容が難しくて授業についていけないので学習意欲が非常に低下しています。」

筆者はＧの相談を受け、親身に話を聞いた。その場で紹介できる日本人はいなかったため、「どなたかあたってみますので少し待って下さい」と、安心させる回答をした。筆者は、教育

熱心なＧの気持ちに応えるべく、解決策を探った。ちょうどその時、職場関係で交流している職員Ｄが、退職のあいさつに来訪した。筆者は「Ｄは数字に強い」と把握していたので、Ｇの悩みを想起したが、Ｄに家庭教師の経験があるか否か、子どもに算数や数学を指導する関心を寄せているか否かは、把握していなかった。しかし、ｒの数学の指導についてＤに伝えた際、真摯に理解し、プライベートレッスンを引き受けることになった。Ｄは、算数や数学に自信があるため、初めての指導には戸惑いは無かったという。毎週１回～２回の指導を受け、ｒの成績は短期間で向上した。それだけではない。数学の良い成績と同様、他の教科の成績も上がったのである（資料-4）。Ｄはｒにサッカーや男性同士での話、自身の高校時代のことや様子、市内の高校のレベル（学業）等の話を交えながら数学の指導をしていった。こうしてＤから適切な指導を受けたことにより、学習意欲に結びついたのである。さらに、高校進学ガイダンスに参加し、親子は明るい将来を描くようになったのである。今回のケースは、適切な指導者と良いタイミングという機会から事が上手く進んだといえよう。

こうして救われたｒのみならず他にも救われる子どももいるはずだ。ｒのように、潜在能力を有する子どもの「ＳＯＳ」の声に耳を傾けると、様々な可能性を見いだすことができる。このケースから明らかになったことは、適切な支援が与えられ、適切な学習機会が与えられたら、子どもの学力は向上するという事実である。このケースでは、数学の学力が向上したという事実が一つのきっかけとなり、他の教科での学力が向上したという成果が認められる。こうして、学力が向上したということは様々な可能性を見いだした後の選択肢にも大きな影響を与えることとなる。一方で、今回のケースは、偶然Ｄがいたから、偶然保護者Ｇの相談相手が筆者であったからということを見逃すことはできない。子どもの教育に関して「偶然よかった」、「運が良い」などに任せても良いのか。本来、rは、指導者の専門知識や技能を必要としているが、指導を十分に受けられない。静岡市における外国人児童・生徒への支援を見守る中、筆者はできる範囲で南米人に情報を提供したい。また、静岡市の支援体制の不足を補うための今後の体制構築が期待される。

**Ｄに対するインタビュー（2015.1中旬）　　資料-3**

子どもの数学の指導について（2014年４月初旬からの指導）

１．外国人への指導を引き受けたきっかけ（動機）は何ですか？
　勉強で困っていると聞いたので、じゃ出来る範囲で助けましょうということで引き受けた。

２．初体験として子どもの数学指導に戸惑いはありましたか？
　別にありません。

３．子どもはなぜ数学の授業についていけなくなったと思いますか？数学の問題等が解けない主な理由もそうだと思いますか？言語・文化の違いや家庭環境はどれくらい関係しているとお考えですか？
　言語の問題。日本語の理解がうまく出来ていない点。
　授業の欠席。中学校１年の終わり　２月、３月の２ヶ月間　日本にいなかった。

４．子どもの「伸びない原因」はどのように把握しましたか？また、子どものニーズに応じたメニューはどのように作っていますか？
　計算問題は出来るが、文章問題になると途端に出来なくなる、ということが分かった。教科書中心に説明し、その都度問題を解いて理解を促すようにした。　後、教科書以外の問題集、ドリル等プリントを用いて行った。

５．月に何回指導していますか？一回につき、何時間指導していますか？
　週に１回１時間。テストが近付くと週に２回。

６．子どもに学習意欲を身に付けさせるため、どのような工夫をしていますか？
　子どもに個人的関心を示して楽しく勉強出来るようにした。例：スポーツに関心があるので時間を取って清水のスポーツの歴史等を分かる範囲で話した。

７．また、子どものレベルを段階的にアップするため、どのような取組を考えていますか？
　難しいレベルの問題を一緒に解く。

８．数学以外、子どもは他の支援などを求められていると思いますか？ 子どもに何か伝えていますか？
　日本語の習得。読解力をつけるよう、国語をもっと勉強するよう親にも伝えている。

**Dによる学力向上対策（2014年11月）　資料-4**

初めて会った時の印象・・暗い顔付きで元気のない様子。

まず様子を知ること：1）数学に関して、どの程度の学力なのか。2）教科書を中心に理解の程度を確認。3）数学が好きか嫌いか。・・・嫌いではない。4）学校のテストの点数をみせてもらう、数学だけ点数がとれている、・・脈有り。5）それで問題集を易しいものから解いていくことにした。1問1問みていく。6）間違ったなら即座に直し、どうして間違ったか考えさせる。正解を教える。7）どのようにするか理解したなら次へ進む。この繰り返しを行った。

個人的関心を示す：運動部（サッカー）や学校の先生の様子、時には時事問題等。

テストが近づく：出題されそうな問題を一緒に解く。学校の授業が分かるようになり、ついていくことが出来るようになった。以前と比べ表情が明るくなってきた。彼の前向きの姿勢がなによりも効果的で良かった。

**成績・・　中1の時、平均より下　目標・・平均になること**
**50点満点**

| 4月初め | 国 | 社 | 数 | 理 | 英 | 合計 | 順位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 3 | 4 | 18 | 4 | 8 | 37 | 148/160 |
| 6月中間 | 10 | 27 | 40 | 26 | 24 | 127 | 83/160 |

**rのコメント**（手書きのコメントをもとに作成）　**資料-5**

ぼくは中学校二年生の生徒です。ぼくはこの6ヵ月間家で算数をD先生に教えてもらいます。
去年一年、勉強がうまくいきませんでした。学校で教えてもらうことが全然わかりませんでした。だからあきらめるところまで行きました。お父さんお母さんに聞いても自分の母語でしか教えてもらえませんでした。だからもっとわからなくなりました。だからもういい点数なんか取れないと思っていました。でもD先生に教わってからだんだんいい点数が取れました。でも最初つまらないと思ったけど、ぜんぜんちがいました。すごく楽しくてわかるまでわかりやすく教えてもらいました。数学だけではなく理科も教えてくれるから、いろんな教科などでだんだん点数がとれました。わからなかった数学の勉強でも学校の授業でももっと参加できるようになりました。だからもっともっとD先生と勉強したいです。

こうして上記のrは支援を受け、将来選択の幅を広げつつある。静岡市の日系人にとって、最も重要な相談窓口として静岡市国際交流協会が挙げられる。市協会では、外国語で情報提供・相談等できる体制をとっており、在住外国人に向けた日本語講座や防災訓練等も実施している。また、静岡市教育委員会の主催で、「日本語を母語としない子とその保護者のための高校進学ガイダンス」が実施されており、共催である市協会も外国人児童生徒や保護者に、高校に進学することの大切さを呼びかけている。当日、市協会の相談員は説明内容を各言語で通訳する。

「はじめに」で、デカセギの子という立場から脱出したい若者は学校的成功を入手することは容易でないと述べた。彼らは、中学校進学時点で国語や数学等で困難に直面し、学習意欲が顕著に低下することが珍しくない。集住地域では、問題が想定されたり表面化したりする初期段階で自治体や地域等の支援や実際的な取り組みが活発になる。具体的には、浜松市の「外国人学習支援センター」による日本語教室、浜松ＮＰＯネットワークセンターによる高校進学支援の取り組み等が挙げられる。しかし散在地域である静岡市の現状は、子どもに制度や支援等がなかなか行きわたっていない。

静岡市に住むブラジル人の生活スタイルが、子どもの生活空間・自己形成空間に必然的に影響を与えると前述した。例えば、日本語教育を担うセンター校に通えない子どもも存在する。また、静岡市には在日ブラジル人学校がなく、日本の公立学校へ通うという選択肢を取らざるを得ないことも少なからず影響している。静岡市によると、近年の動向を見るとセンター校に通えない地域に散在する人数が増加しているため、訪問指導のニーズは高まっているという。しかし、支援体制に限界があり、指導を十分に受けられない者も少なくない。

日本各地の学校は、児童・生徒の学習・生活状況を把握して課題を明確にし、各学校の実態に即した学力向上プランを作成したり、教員を対象とした研修会及び公開授業を開催したり、子どもの学校教育の質の向上をめざしている。また、学校運営の改善のため、保護者や地域住民を巻き込んだ課外活動や行事の企画・運営を行っている。しかし、静岡市在住の南米人の父

母は言葉の障壁をはじめ、学校と上手くコミュニケーションが取れないことや、子どもの学習内容あるいは学校の制度自体がわからないこともある。また、学校教育において、外国人の子どものスタートラインは、他の子どもと比べ、基礎的・基本的な知識・技能等が大きく異なるため、ｒのように中学校に進んだ途端に、学習上の困難が噴き出すことも多い。このケースは、学校現場以外でのボランティア支援によるものであったが、子どもは「わかる喜び」と「学ぶ楽しさ」を実感し、学習習慣を身に付け、学力向上に結びついたのである。

現在、ｒは志望の高校に入学し、Ｄと同じく大学の工学部への道を進みたいという。Ｇは、当時のことを振り返り、次のように語った。「ｒは、本当に恵まれている。Ｄから適切な指導を受けたため、学習意欲に結びついたのです。ｒを救ってくれたＤに本当に感謝しています。また、Ｄとの相性が非常に良いので今でも交流を深めており、日本人との交流に魅力を感じています。日本人と接しないとわからないことがたくさんある。と、つくづく思います」。

## おわりに

本論文においては、地方における散在地域静岡市の日系人社会と、サンパウロ州の地方におけるアリアンサ日本人移住地とを、素朴ながら対比してきた。異国での日系人社会の形成に伴うソーシャル・ボンドをめぐる状況が、子どもの教育にどう関連するのかを検討することが狙いであった。アリアンサと静岡市で日系人が置かれた環境には類似しているところがあり、外国（異）文化に包囲されたなかでの日系人社会の形成をめぐる困難や課題についても重なる点が示唆された。マイノリティとして異国の地で日系人社会を形成していくうえでの言語や文化の障壁、地域社会への参入の壁、移民同士での結婚や混血、若者における学校的成功や社会的地位への意識あるいは民族意識の希薄化などが挙げられよう。他方で相違点も著しく、それが異国でのソーシャル・ボンドづくりにも直に表れていた。それは、アリアンサのみならずかつての移住地各地の日本人同士の助け合いから生ずる一体感と、外部全体社会との共存の努力である。彼らは、日系人社会の存在感を醸成しながら、家族・親族・移住地域をあげて伝統文化等を共有・保持することに力を発揮してきた。そして同時に、ブラジルの主流文化との共存に努め、地域社会との調和にも積極的に取り組み、それも合わせた多種多様なソーシャル・ボンドを作り、広げ、多くの子どもに生涯にわたる様々な恩恵をもたらしてきた。子どもは実際に家族や地域住民と伝統文化の様式や精神を共有し、かつブラジル社会からも共感的に受容された。子どもは学校以外の環境で生きる力を身に付け、自尊心も高める。それでいて、かつて単一民族的意識の強い日本人移民には「同化の志向性がない」と捉えられた時期もあったが、定着した日系人像が、やがてブラジル人側から高い評価を受けるに至る。日本人像が日本に対する信頼や親日的な感情に結びついたことは、移民100年以上を経た現在でも、2016年のリオ・オリンピックをめぐる会場内外における様々な場面・出来事からも再確認することができた。

他方で散在地域静岡市の日系人には、「様々な日系人スタイル」が存在していた。多種多様な「質・量・年齢」が交じり合う中、しかし、異文化を背景にする彼らの仲間意識や一体感は総じて希薄化してきていた。日系人同士での一体感が高まらないため、多種多様なソーシャル・ボンドづくりになかなか至らない。一つの要因として、彼らの「デカセギ」という意識が根深く定着しているため、現在の居住は一時的な生活の場として考えられていないことが挙げられる。静岡市の日系人が迎えた2008年の経済危機と2008年から2011年の地震・津波・放射能事故までの過渡期は、彼らの労働環境や生活環境等の不安定な状況を意識させ、帰国願望は捨てられないものの定住先が未定である者は少なくない。地域社会への参入の壁を含め、彼らの

生活スタイルや彼らを巡る内部の問題、諸条件が混在する中、閉鎖的な仲の良い仲間関係を意識し、欲するようになる。そこでは自己形成空間や人的環境が社会的なつながりや絆に結びつきにくい。もう一つの要因は、世代交代である。多様かつ複雑な彼らのコミュニティ形成や生活環境等の影響により若者のパターンも変化している。日系人の世代差の出現やブラジル人の社会形成に伴う諸条件を受け、若者は①民族意識の無いタイプと、②民族意識の有るタイプに収斂していき、民族意識の薄い中間的なタイプも存在する。①の場合は、ブラジルや静岡市におけるブラジル人社会に関心を寄せず、学校等を通して日本の流儀を身に付けた者であり、日本人との交友関係や交流等を求めるが、保護者は異文化や言葉の壁に直面し、家族ぐるみの積極的な交流にまでは深まらない。彼らは、成長するにつれて自分の国籍や容姿、家柄、社会的地位、生活スタイル等を意識し、また、ブラジルの名前を否定的に考えがちである。日本文化・社会との調和に向かう指向性はあるものの、組織性をもったソーシャル・ボンドには至りにくい。②は殆どの場合、ブラジルにルーツがある若者、或いはブラジルを知らないか社会経験はないが、閉域的な交流や活動を通して仲間意識や民族意識を高めている若者である。静岡市の若者の共通点として（1）いずれも人的環境が制約されている、（2）地位等を意識し、デカセギの子という立場から脱出したい願望が強い、という２点が挙げられよう。

本論文で取り上げたいくつかの実例は、筆者が従事している外国人窓口で相談を求めたブラジル人の事例であるが、彼らの相談に耳を傾けることから打開策が見いだされるケースもあり、「小さなソーシャル・ボンドを通して外国人の子どもを地域で活かす」ということに結び付けたい思いもある。こうした事例は、問題等が表面化しないまま静かに浸透していくのに加え、個別化された問題として捉えられがちである。散在地域静岡市に特有のニーズに応じて、支援体制の改善や日系人の積極的な取り組みが期待される。また、学校運営改善のため、地域社会への参入のため、自治体や団体、保護者、地域住民を巻き込んだ課外活動等が重要視されている。いたわりの言葉や挨拶、日頃の付き合い、地域の諸活動への参加などという「人とのかかわり」は子どもが主体となって地域社会への参入に繋がるであろう。この、日頃の「人とのかかわり」の重なり合いが、「つながり」に結びつくのである。子どもが自分の可能性を見いだすためのソーシャル・ボンドは社会が変容しても国境を越えても重要視されるのである。

今後は、「静岡型小中一貫教育」への取り組み等という大きな課題に着目しつつ、第二世代や第三世代の外国人児童生徒の可能性と展望を課題として考察していきたい。加えて、技能実習生と日系フィリピン人の増加を視野に入れながら、日本とブラジルの経済情勢を巡る新型のデカセギパターン（＝移住型）の動きや経緯、方向性等についても検討していきたい。

**註釈**

１）本論文は中澤による平成26年度修士論文の成果を発展させたものであり、本『研究報告』掲載上の必要から研究指導教員であった菅野との共著という体裁をとったが、本来は中澤個人による研究成果である。文中の「筆者」等もすべて中澤一人を指すものである。

２）筆者は「相談員」として、静岡市国際交流協会清水支部、静岡労働局、静岡公共職業安定所、静岡市教育委員会に勤務し、各窓口でポルトガル語およびスペイン語で通訳・相談対応に従事している。本論文ではこうした役割を総称して「相談員」と呼ぶ。

３）アリアンサは第一、第二、第三アリアンサと弓場農場で構成されている。1924年に建設された第一アリアンサは、首都サンパウロから北西へ向かって約600キロの場所にある。

４）個人情報について、本論文での記述から個人の特定につながることがないよう配慮した。

個人及び家族に関わる記述に際しては、実際とは異なる架空のイニシャル（大人を大文字、子どもを小文字で表記）を用いることはもちろん、個人の特定につながりかねない場合には細部をぼやかしたり、複数事例を重ね合わせて個別具体事象と距離をとったり、「一般論」「ストーリー」化したりした。詳細にわたる事例については、関係者の承諾を得て掲載した。

５）2016年の秋に101歳を迎える新津英三（にいつ　えいぞう）は、第一アリアンサに住んでおり、平成22年度に全国で行われたＮＨＫ学園の俳句部門大会で「秀作」として入賞した。

６）São Bernardo do Campo市はサンパウロ市の南東に隣接する街であり、アルモニア寮創設当時は13名の学生が存在し、その後、学生寮として毎年約180人の学生を受け入れていた。

**主要参考文献**

アリアンサ日伯文化体育協会『写真アリアンサ2008　サンパウロ州奥地のある日系移住地と日系家族の肖像』 Nippak Graphicsブラジル、サンパウロ, 2009年６月

アリアンサ日伯文化体育協会『アリアンサ移住地1924-2007年　創設八十年』ブラジル国サンパウロ市サンジョアキン街パウロス美術印刷会社, 2012年８月

木村快, 2014『Aliança, A Terra da Cooperação ―*Os japoneses que sonhoram com o cooperativismo no Brasil*―』Editora Jornalística União Nikkei Ltda.

木村快, 2013『共生の大地アリアンサ―ブラジルに協同の夢を求めた日本人―』同時代社

宮島喬, 2014『外国人の子どもの教育―就学の現状と教育を受ける権利―』東京大学出版会

内閣府　定住外国人施策推進室, 2016 『日系定住者外国人の集住する地方自治体における取り組みについて』（定住外国人支援施策事例集）

小内透, 2003『在日ブラジル人の教育と保育―群馬県太田・大泉地区を事例として―』明石書店

小内透, 2009『講座トランスナショナルな移動と定住「定住化する在日ブラジル人と地域社会」』第１巻～第３巻, 御茶の水書房

関口知子, 2003『在日日系ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成―』明石書店

静岡市男女参画･市民協働推進課が行った「静岡市による外国人に対するアンケート調査」「静岡市多文化共生推進プラン～多文化共生社会の実現を目指して～」 静岡市外国人住民数（2014年９月末現在）

静岡新聞「ブラジル日系人五輪注視」2016年７月13日

山本晃輔, 2014「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択―移動の物語に注目して―」『教育社会学研究』第94集 東洋館出版社

**主要Website**

アリアンサ運動の歴史　第一部アリアンサへの道
http://www.gendaiza.org/aliansa/lib/23-02.html

Colégio Harmonia外務省：世界の学校を見てみよう！ブラジル連邦共和国サンパウロ編
http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/brazil_sp_2015.html

木村　快　多文化共生と日本文化　会報『ブラジル特報』2013年11月号掲載
http://nipo-brasil.org/archives/3781

ニッケイ新聞「第一アリアンサ＝長野村、盆踊りに１千人＝若者たちも夢中でダンス」2015年９月22日　http://www.nikkeyshimbun.jp/2015/150922-72colonia.html

小嶋　茂　http://tamrhyouka.hiho.jp/sonota-burajirunikkei.html